

# 文脈把握にみる 日本語母語話者と日本語学習者の 接続表現比較

坂 東 正 子

## 1. はじめに

日本語学習者にとって、文脈展開に一貫性のある文章が書けることは、日本語の文章を作成する上での有効な能力である。とりわけ、留学生にとって、自己の主張を一貫性のある文脈展開に組み立てることのできる力は、講義や演習での課題レポートや論文作成などに必要な能力である。

ところで、このように日本語での文章作成を要求される学習者と日本人とを比較した場合、文章における論理的思考の展開、すなわち文脈展開が異なるのではないだろうかという疑問が生じる。外山（1992）は「外国人の発想は日本人と異なるが故に、その表現する文章にも発想の違いが、ひいては論理性の違いが見られる」と述べている。しかし、筆者は、学習期間やレベルが異なる学習者が作成した文章から、「学習者は学習レベルが上がるに従い、日本語と母語との文脈展開の違いを認識したり、それに慣れてきたりする。ただ、段落と段落のつながり方、言い換えれば、話題と話題のつながり方が日本人と異なるためか、文脈展開に唐突な印象を与えることがある」と見ている。

そこで、本稿では上級レベル・上級レベル以上の日本語学習者が、文脈展開に一貫性をもたせるため、論理的な文章においてどのような接続表現<sup>1)</sup>、言い換えれば、文と文あるいは段落と段落をつなぐ形式を使用するかを明らかにしてみたい。しかし、接続表現のみに注目するのではなく、その背後に存在する文章の構成形式<sup>2)</sup>（市川 1978 pp.156-157）をも視野に入れたうえで、文のあるいは段落の接続関係<sup>3)</sup>、即ち、論理的関係の把握の仕方をみる。そこから、文脈の流れをどう把握するかが見えてくると考える。

## 2. 先行研究

本節では、上述の文脈展開の一貫性とそのための表現形式に関する研究に言及する。但し、本稿では、結束性について、文と文とに内容的なまとまりがある場合に文脈展開に一貫性があるといい、一貫性という用語を使用している。また、接続表現については、その指す範囲を註<sup>1)</sup>に示した。これらが、次の先行研究で

使用される概念と異なる場合があることをはじめに断っておく。

西原(1990)は、日本語と英語の表現様式(修辞法)の差異について結束性の概念の枠内で検討を試みた。それは、「日本人の話はまわりくどい」、「英語母語話者の話は最初の2~3分で大体予想がつくが、日本語母語話者の話は最後の2~3分のところを聞くまでさっぱり分からない」という点を言語的に把握する目的により、指示詞、接続表現、文の提出順序を観察・対照したものである。前者の「まわりくどさ」については、『Newsweek』誌の日・英両語版の同一内容の記事を資料とし、指示詞および接続表現の使用頻度と表現語句を調査・対照している。また、後者は、日本人の英文報告書と英語母語話者(編集者)によるその修正文書の対比、及び日本人の和文報告書原稿の逐次通訳と、それを自然な英語に書き直したものととの対比を資料として、文の提出順序を観察したものである。それらの結果をもとに、「日本語における指示詞および接続表現の多用から、日本語ではこれらが文脈の前後関係を確認する修辞パターンとなる」、また「日本語では章の終りに配置される内容が英語では冒頭に置かれるという修辞パターンの差から、次に続く部分の内容予測・期待が異なる」と述べ、日本語と英語の修辞法の差異についてまとめている。

杉田(1994)は、中国語、韓国語、英語を母語とする上級日本語学習者と日本語母語話者を対象として、複数の文を並べ替えて一貫した文章を作るという調査を実施し、それぞれの文章構造を話題展開の面から分析した。調査の結果、日本語母語話者群では、一定の文の組み合わせから成るいくつかの意味のまとまりが現れることが多く、またそうしたまとまりの配列順序も「一般論(陳述)→特定の話題(陳述)→一般論(主張)」という順序に一致する傾向が強かった、と述べている。一方、学習者には、日本語母語話者とは異なる特徴が検出された。しかも各グループ内でのばらつきが日本語母語話者に比べて大きく、そのために学習者群における型の有無について結論を下すことはできなかった、とある。しかしながら、日本語母語話者と学習者の間の差は予想されたほど大きなものではなく、一般的な叙述で書き起こして一般論に関する主張で締めくくるという流れを取る者がどのグループでも多数を占めた、とまとめている。また、研究課題の手続きの中で、杉田は自然な文章になるように、必要に応じて接続語句などの追加を認めるとしたが、結果分析では対象外としている。接続語句を分析対象とすることは、杉田(1994)では目的外の事柄ではあるが、接続語句は文脈展開の一貫性に関わる要素の一つである。であるので、筆者は、接続語句の使用実態の把握を、文脈展開の一貫性をみる方法の一つとして、調査対象に考えている。

接続表現に関して、佐藤(1990)は、接続表現の日英比較の結果、英語では内容の論理的展開に主要な機能を果たす「順接」「逆接」を表すものが多いのに対

し、日本語では内容の展開にさして大きい影響を与えないであろう「順序・換言・例示・注釈」が多いと指摘している。また、水野（1985）は、「中国語でも文の接続を表すために一定の形式が用いられるということはあるが、そうした接続を表す形式なしに文をつないでいくことができるという点をまず確認しておくことが必要である」（p. 79）と述べている。これらは、英語および中国語に関する記述であるが、朝鮮語の接続詞について、「日本語と平行的な接続語彙が多く、それらを使用しない文章は、切れた感じの繋がりのない文章になる」<sup>41</sup>と聞く。

以上の枠組みおよび言語的背景を視野に入れ、本稿では、文脈展開の一貫性をはかる手段としての、文あるいは段落をつなぐ形式について見ていきたい。

### 3. 調査の目的

学習者は述べたい事柄や主張したい内容を盛り込んで、小論文などの文章を作成する。その場合、参考文献を引用したり自分の考えを入れたりしつつ、序論・本論・結論と全体の構成を考える。筆者が小論文指導に携わった時にも、このような観点で当たった。しかし、完成した学習者の小論文には、文や内容を並べただけの文章であったり、文脈展開に不自然さを感じさせるものが見られたりした。このような要因のひとつに、接続表現の不適切な使用・不使用が挙げられる。

そこで、本稿では、文脈展開に一貫性をもたせるという視点から、接続表現に焦点を当て、文章における日本語学習者のその使用実態を調査・分析したい。具体的には、接続表現をぬいて提示された文章を読み、学習者がその空いた部分に何を記述するかを、即ち、文脈展開に一貫性をもたせるためにどのような関係把握をするかを調査の目的とするのである。かつ、日本語学習者と日本語母語話者の表現を比較・対照することで、その類似点・相違点をみることも目的としたい。それらから見えてくる学習者の表現特徴は、論文指導・読解指導のための基礎資料になると考える。

### 4. 調査の方法

#### 4.1. 被調査者

被調査者は、日本語学習者28人（大阪外国語大学学部学生20人：韓国語母語話者12人・中国語母語話者8人、同大学予備教育コース・上級クラス学生8人：英語母語話者4人・スペイン語母語話者3人・ポルトガル語母語話者1人）および日本語母語話者29人（同大学学部学生）である。

## 4.2. 調査内容

調査の目的に従い、調査課題は、1. 文章中の空欄に適切であると考えられる接続表現を記述する、2. 段落の区切りになると考える箇所に線で印をつける、3. それら以外に考えたことを記述する、の3項目を設定した（原文、調査用紙は資料1、2を参照）。以下は課題設定の各理由である。

1. 一定の文章構造（話題の配列）が提示されている場合、文脈展開に一貫性をもたせるために、どのような接続表現を用いるか（用いないか）を調べる。
2. 接続表現と関連づけて、文脈展開のどの部分に段落としての内容上の区切りを認めているかも調査する。課題内容をこの1. 2. の順に設定したのは、接続表現の使用実態を調査することが、第一目的であるからである。
3. 被調査者が1. 2. 以外に述べたいことを知るために設ける。

この課題のための調査用文章の選定については、大学入試課題の小論文（長さ700-900字程度）および市川（1978）の「文章の構成形式」を基準に、論説的な文章を4編選定し調査に使用した。選定の視点は、調査Ⅰ：展開が明確な尾括弧の文章、Ⅱ：頭括弧の文章、Ⅲ：尾括弧が2編合わさった文章、Ⅳ：尾括弧であるが原文では接続表現をほとんど使用していない文章、である。

## 4.3. 方法と時期

文章の表現・理解に役立てるため、文と文あるいは段落と段落とをつなぐ形式について、日本語学習者が使用する様々な表現を知りたいという主旨のもと、4種類の調査用紙に回答してもらった。回答時間を学習者は合計50分、日本語母語話者は同25分と制限した。また、読解問題ではなく内容把握ができていることを前提にした調査であるので、学習者への不利益を考慮し、文章にはルビをふり語句説明も用意した。調査時期は、1996年6月、7月である。

## 5. 調査結果とその分析・考察

上述の通り調査は4種類（Ⅰ～Ⅳ）あるが、本稿では紙幅の都合で、特徴が最も顕著に見えた調査Ⅱのみを対象とすることにする。以下、本節の5.1.では原文の文章構造について、5.2.では調査課題1.について、5.3.では調査課題2.について述べる。

### 5.1. 文章構造と文脈展開

この文章は、最初にまとめ（主題）を述べる頭括式の構造である。図1の段落Iはカバに対するぼくの態度、II～IVはカバが死んだ時のことである。そのなかのII・IIIは、解剖の結果分かった事実を対照的に述べる客観的描写であり、IVはその事実に対する反応とぼくの思いである。主題を述べるための文脈展開には、図に記した接続表現・提題表現<sup>7)</sup>・叙述表現<sup>8)</sup>等が、相互に機能し合っている。

＜図1＞ 「カバこそぼくの人生」の文章構造

段落	文番号	接続表現	提題表現 <sup>7)</sup>	叙述表現 <sup>8)</sup>	文章構造・構成形式
I	(01)		カバは	～一人な時で生活。	カバの生活の中心にカバが居る
II	(02)	【(く)】	カバの死んだ時、	死んだことがあった。	カバの死んだ時の解剖でわかったこと 体各部位の大きさ・重さ
	(03)		【 * 】	～仲で居た。	
	(04)		【 * 】	死んでしまったのが、	
	(05)		【 * 】	カバを解剖した時である。	
	(06)		【 * 】	～面白いものであった。	
III	(08)	【(く)】	解剖の結果、	カバの骨が小さかった。	骨の軽さ
	(09)	【(く)】	【 * 】	～のっぺりしていた。	
IV	(10)	【(く)】	解剖学の先生がだが、	～笑い出した時、	解剖の結果わかったこと ぼくの立場
	(11)	なるほど、	【 * 】	みんな腹が立ったか。	
	(12)	そして	【 * 】	生後二三日の時と同じである。	
	(13)		【 * 】	話すこともできない状態は、九歳でできる。	
	(14)	だが、	【 * 】	バカと目されてもしょうがないが私はバカだ。	
(15)		【 * 】	～バカに見えた。		

※ [ \* ] : 「略題表現」を意味する。

## 5.2. 調査課題1. の回答分析

### 5.2.1. 調査結果を表す表・図

課題1. の回答は、市川 (1978) 「文／段落の連接関係の基本類型」 (pp. 89-94) に基づき類型別、被験者の母語別に分類・集計し、次のページの表1に示した。表1・左欄の記号は、次の母語話者を表す。K: 韓国語母語話者、C: 中国語母語話者、EA: 非漢字圏・印欧諸語を母語とする話者、J: 日本語母語話者である。また、回答類型の「×」は、市川の三種類八連接類型<sup>7)</sup>の「連鎖型」に分類されるもの、あるいは接続詞を想定できるものを意味する。ここでは、被調査者の判断が「×」であったことを示すために、別に「×」の項を設けた。また、類型の右 [ ] 内の数は、その母語別回答数/母語別人数の割合であり、下段には表現例とその数を記した。そして、それをグラフに表したのが図2～5である。ただし、図は、日本語学習者と日本語母語話者の二区分での集計結果である。図では両者の異同を数量で直接比較し、母語別の特徴については表1を利用することにする。以下、回答(か)から順に、日本語学習者と日本語母語話者の特徴を対比的にみる。その上で、文章構造も視野に入れながら、顕著な特徴に焦点を絞

り分析していく。

<表1> 日本語学習者および日本語母語話者の連接表現

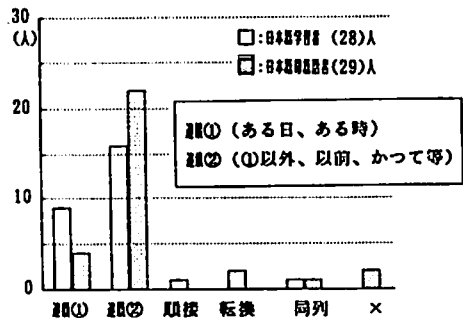
母語	被調査者各グループの回答類型 (上段は母語と接続/接続(し)※、下段は接続とその数)				
(か) K	連続 [91.7] ある日、ある時、/ある日、ある時、	転換 [16.7] ある日、ある時、			
(か) C	連続 [87.5] ある日、ある時、/ある日、ある時、	転換 [12.5] ある日、ある時、			
(か) EA	連続 [87.5] ある日、ある時、/ある日、ある時、	同列 [12.5] ある日、ある時、			
(か) J	連続 [89.7] ある日、ある時、/ある日、ある時、	同列 [3.4] ある日、ある時、	× [6.9] 2		
(き) K	逆接 [41.7] ある日、ある時、	添加 [41.7] ある日、ある時、	補足 [8.3] ある日、ある時、	連続 [8.3] ある日、ある時、	
(き) C	逆接 [75.0] ある日、ある時、	添加 [12.5] ある日、ある時、		連続 [12.5] ある日、ある時、	
(き) EA	逆接 [50.0] ある日、ある時、	添加 [12.5] ある日、ある時、	転換 [12.5] ある日、ある時、	補足 [12.5] ある日、ある時、	× [12.5] 1
(き) J	逆接 [89.8] ある日、ある時、	添加 [3.4] ある日、ある時、	転換 [3.4] ある日、ある時、		連続 [3.4] ある日、ある時、
(く) K	添加 [33.3] ある日、ある時、	連続 [41.7] ある日、ある時、	× [16.7] 2	同列 [8.3] ある日、ある時、	
(く) C	添加 [62.5] ある日、ある時、	連続 [25.0] ある日、ある時、	× [12.5] 1		
(く) EA	添加 [12.5] ある日、ある時、	連続 [50.0] ある日、ある時、	× [25.0] 2	？ [12.5] 1	
(く) J	添加 [75.9] ある日、ある時、	連続 [13.8] ある日、ある時、	× [10.3] 3		
(け) K	連続 [58.4] ある日、ある時、	× [8.3] 1	転換 [16.7] ある日、ある時、	添加 [8.3] ある日、ある時、	無答 [8.3] 1
(け) C	連続 [37.5] ある日、ある時、	× [25.0] 2	転換 [25.0] ある日、ある時、	逆接 [12.5] ある日、ある時、	
(け) EA	連続 [50.0] ある日、ある時、	× [25.0] 2	転換 [12.5] ある日、ある時、		？ [12.5] 1
(け) J	連続 [41.4] ある日、ある時、	× [48.4] 14	転換 [3.4] ある日、ある時、	逆接 [3.4] ある日、ある時、	添加 [3.4] ある日、ある時、

5.2.2. 各回答とその特徴

5.2.2.1. (か) <表1、図2>

文(01)は、筆者のカバに対する思いや態度を叙述する文であり、ル形で述べている。一方、(02)以降は、カバの死という具体的場面での描写であり、タ形で過去の出来事として叙述している。文(02)の「カバが」の「が」からも、話題の移ったことが分かる。これら、提題表現や叙述表現だけでなく、(か)に

<図2> (か)の回答類型とその数



想定される接続表現についても、話題を具体的場面に移す語句、あるいは転換の機能を持つ語が考えられる。

(か)の回答として、日本語学習者も日本語母語話者も大多数が連鎖型を、なかでも「時を示す語句」をあげている。しかし、それらは機能の異なるものを含むので、その区別のため、連鎖①(「ある～」:ある日、ある時)、連鎖②(①以外の語句、以前、昔、かつて等)に二分した。そのうち、日本語母語話者には連鎖②が圧倒的に多く見られる。学習者もその傾向にあるが、韓国語母語話者には連鎖①「ある日」が顕著に見られる。

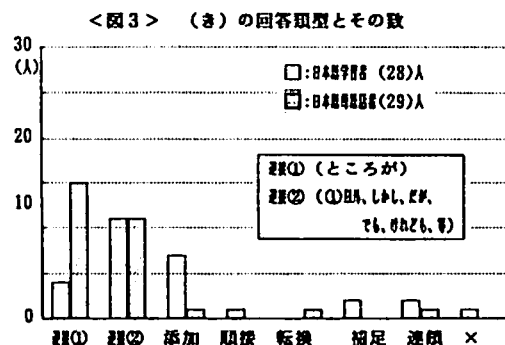
ここで、連体詞「ある」による「ある日、ある時」の使われ方を検討してみる。そもそも連体詞「ある～」は場所や時などを限定しない漠然とした表現である。「昔々、ある所に、……。ある日、……」のような昔話では、架空の日に架空の日を設定して、話題を展開させる用法である。しかし、この(か)に「ある日」を使用するならば、作者が体験した特定の話であるにもかかわらず、漠然とした架空の場面設定をすることになる。また、文末の「～ことがあった」は経験や事実を表す表現であるので、「ある日」と文末とが一致しないことになる。それらが不自然さの原因であると考えられる。このようなことから、(02)の(か)には、連鎖②として区分した「以前、昔、かつて」等のような語彙の方がすわりがよく、それらは段落と段落の接続をうまく機能させる語句であるといえる。

しかし、韓国語母語話者に「ある日」が多く見られる理由は、筆者には分からない。ただ、朝鮮の昔話では、「昔ある所に……」で始まることが多く、日本の昔話と導入部がそっくりである<sup>3)</sup>ということが理由にあるのかもしれない。それについては、詳しく調べる必要がある。

#### 5.2.2.2. (き) <表1、図3>

(か)で見たように、(き)でも学習者、日本語母語話者共に多数が同一種類の接続語を回答している。それは、ここでは逆接類型であるが、(か)ほど集中傾向を示していない。なかでも、韓国語母語話者は逆接型と添加型に二分できる。

次に、逆接の回答内容をみると、それらは、市川の接続関係の下位区分により、意味機能に応じて①「ところが」と②「しかし、だが等」に大別できる。日本語母語話者には②も多いが、それ以上に全体のほぼ半数が①「ところが」をあげている。一方、学習者には①が少なく、②の方がはるかに多い。



日本語母語話者に多い「ところが」では、意外性、予想外の驚きを表すことになる。そこには、(08)「ザブコの脳は、おどろいたことに他の部分の偉大さに比べ、たった六百グラムしかなかったのである」の波線をつけた語句が効果的に機能したと考えられる。一方、「しかし、だが、でも等」の回答者（学習者はこちらの方が多い）には、文(05)～(07)でのザブコのからだ各部位の大きさ・重さと、(08)での脳の軽さを、単に逆の意味に取る対比的思考が働いたと考えられる。また、少数であるが、主として学習者に見られるソ系の添加類型「そして、それに」等も注目するところである。そこには意外性も対比的思考もなく、ただ体の各部位の叙述に加えた脳についての叙述である、という把握が働いているのではないだろうか。

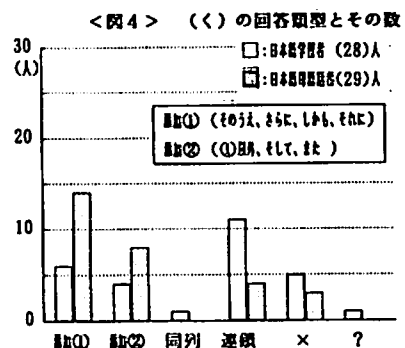
以上、学習者の文脈把握について、逆接といえども、意外性ではなく2つの事柄を対立的にとらえる思考が働いている、また、ソ系の接続詞を使用していることから、カバの叙述について並列的に添加している、といえる。即ち、日本語母語話者が細かいニュアンスを読み取って答えているのに対し、学習者は対立的あるいは並列的な把握であった。

#### 5.2.2.3. (く) <表1、図4>

(く)では、(か) (き)のような集中傾向は見られない。日本語母語話者に多く見られる回答類型は添加型であるが、学習者には「一般に、脳には」のような連鎖型の連用修飾語句が多く見られる。ただし、中国語母語話者は日本語母語話者に近い傾向を示している。

さて、文章構造との関連で、(く)にいたる文脈把握を考えてみよう。文(02)～(04)で「解剖した時」という場面設定をした後、(05)～(07)ではカバの体の各部位の重さ・大きさについて、(08)(09)では脳の軽さ・小ささについて述べている。従って、(05)から(09)に至る文脈把握の仕方が、(き) (く)の回答に表れる。具体的にいえば、(く)に

「そして、そのうえ」等の添加型を回答することは、前文までの内容に追加する、という連続性で把握することである。同じ添加型でも、「さらに、しかも」等は、単純な添加である「そして」よりも強く、(08)でのあまりの軽さに対する驚きに加え、「しわが、まったくなく、まるで豆腐の表面のようにのっぺりしていた」という視覚的な驚きも追加することになる。ここで、(き)に意外性の意味機能をもつ「ところが」を、(く)には追加の「さらに、しかも」を考えるならば、





カバの描写を強制的に把握する展開になる。一方、(く)を「脳には」のような連鎖型・連用修飾語句でつなぐ回答は、文(08)の「ザブコの脳は」を持ち込んで答えたものである。そこには、前文と後文をつなぐ工夫は見られるが、(05)から(09)にわたる広い範囲での文脈把握は感じられない。この理由により、図4では、添加型を添加①、添加②に分けグラフに記した。

では、これらの連続的把握について、実際の回答をみてみよう。表2は、(き)を逆接型、添加型で回答した者は、(く)で何を或いはどの類型で答えたかを記したものである。表2から、次のことがいえる。(き)を逆接①で回答した者は、

<表2> 回答(き)～(く)の文脈把握

回答	K学習者(12)人			C学習者(8)人			EA学習者(8)人			J学生(29)人		
(き)	逆接①	逆接②	添加	逆接①	逆接②	添加	逆接①	逆接②	添加	逆接①	逆接②	添加
↓	1	4	5	3	3	1	0	4	1	15	11	1
((	しかも1	逆接3	逆接3	それに1	さらに1	逆接1	0	逆接2	逆接1	添加①7	添加②5	添加①1
		×1	×1	しかも1	また1			×1		添加③3	添加④5	
			そして1	そのうえ1	×1			そして1		逆接2	×1	
										×2		

※(き) 逆接①:「ところが」、逆接②:「しかし、だが、でも、けれども」、(() 添加①:「そのうえ、さらに、しかも、それに」  
 添加②:「そして、また」を意味する。また、表内の数は、ここで数値を当てて見ている回答の数を表す。

(く)を添加①で答える傾向にある。そして、その傾向は中国語母語話者や日本語母語話者に多く見られる。一方、韓国語母語話者や非漢字圏・印欧諸語を母語とする話者は、逆接②や添加型から、連用修飾へと展開させる傾向にある。この現象は、先行研究で述べた「中国語は接続の形式なしに文をつなぐことができる」という水野の研究と異なるものであるが、理由に関しては改めて考察したい。

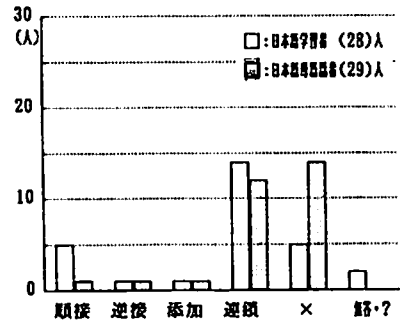
#### 5.2.2.4. (け) <表1、図5>

学習者、日本語母語話者ともに回答傾向は連鎖型に集中しているが、なかでも韓国語母語話にこの傾向が強い。一方、日本語母語話者は、連鎖型以上に「×」の回答の多いことが分かる。ここで、回答内容の詳細を分析する前に、文章構造との関連で、文脈展開をみることにする。文(02)以下(15)まではザブコが死んだ時のこと

であるが、(09)までは解剖によって分かった身体の実況的描写であり、(10)からは「ぼく」の思い(立腹)とその根拠を説明する叙述である。(10)では、「解剖学の先生がたが、～笑い出した時、ぼくがどんなに腹が立ったか」のがでマークされる語句から、話題の推移が理解できる構造であることが分かる。

次に回答の詳細をみてみよう。(10)の文頭にある(け)について、日本語母語話者・学習者共に連鎖型・ソ系指示表現「それを見て/見た」、またはソ系の順接型接続詞「そこで、それで」等が目につく。前者は前文までの内容を後文に持

<図5> (け)の回答類型とその数



ち込む機能を、後者は論理的思考を働かせたと考えられる。日本語母語話者の回答「×」については、後の5.3.で述べることにする。

以上、調査課題1.の結果について、一般的傾向および顕著な母語別特徴について述べてきた。(か)～(け)の結果をまとめると以下のことがいえる。

①(き)の回答に大多数が「逆接」をあげたことから、内容の論理的展開に主要な機能を果たす「逆接」は、学習者にとっても把握・表現が容易なものではないかと考えられる。また、学習者に連鎖型、添加型の回答が多く見られることから、佐藤(1990)が指摘する日本人に多く見られる文脈の流れを円滑にする手段について、学習者もこの手法を学んでいると取れる。

②母語話者と学習者は共に、同一の類型を回答する傾向にあるが、同一類型でも、その意味・機能(下位区分)で異なる語句を回答することが多い。逆接類型、添加類型など同一類型内での回答の違いは、文脈の流れのなかにある語句のとらえ方が影響して、意味機能の異なる接続語句を選んだと考えられる。それは、ひとつの回答に、連用/連体修飾語句、或いは接続詞が見られた回答も同様である。

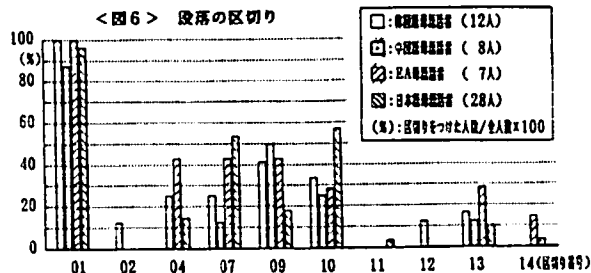
③韓国語母語話者には、連体詞「ある～」をはじめとして、連鎖型でつなぐ回答が、他の母語話者より多く見られた。また、中国語母語話者には、(き)(く)の把握において日本人に類似した傾向がみられた。これらが、水野の中国語の接続形式に関する指摘、朝鮮語の接続詞に関する説明とどう関連するかについては、資料数・被験者数が少数であるため、単純に比較・言及することはできないが、全く異なる結果が出た。今後データを増やして検討する。

### 5.3. 調査課題2. の回答分析 <図1、図6>

調査課題2.は、文章構造全体において、接続表現との関連で内容上の区切りをどう認めるかを見るものである。

先ず、接続表現を想定する(か)～(け)とその直

前の区切り箇所との関連を量的に見てみよう。区切り番号01と(か)、07と(き)、08と(く)、09と(け)という隣接する箇所のなかで、学習者と日本語母語話者の両者の圧倒的多数から100%に近い回答を得たのは、01と(か)である。その他の箇所では、08と(く)は全く回答がないのであるが、あとの2箇所は50%近くの回答を得ている。また、10への回答も約30%～60%とかなり見られる。



次に、上記の量的傾向を接続表現と関連させて内容面から見てみよう。まず、大多数が 01 を回答した理由として、次の 4 点があげられる。①この「頭括式」という文章構造自体が、文脈展開の把握が容易なものであること。②文(01)と(02)がそれぞれに、質の異なる提題表現・叙述表現から成るため、把握しやすいものとなったこと。③(か)に時を表す連鎖型接続表現を被調査者自らが想定したことが、場面設定を考える機能としてはたらいしたこと。④この三点が補完しあって文脈把握を容易にしたことである。

しかし、07と(き)、09と(け)、10と「なるほど」(文(11)の冒頭)には、接続表現の文脈展開の役割に対して、これらとは異なる思考が働いていると考えられる。まず、07と(き)について、(き)の逆接型の回答から、07までの「体の偉大さ」と後続の「脳の小ささ」を対比的に把握していると解釈できる。しかし、小さな脳も偉大な体の部分であると取れば、(き)の機能は文脈の流れに区切りをつけるものではなく、一連のものとして含み込まれることになる。ゆえに、学習者に多く見られる添加型の回答は、接続詞そのものが添加の働きをして、後件が前件に加えられ包み込まれることを意味すると考えられる。また、09と(け)の関連については、順接型接続詞「それで、そこで」あるいは「連鎖型・連体/連用修飾語句」を用いた回答には、09に区切りの意識が働いていると解釈できる。その場合、09に続く文(10)の「解剖学の先生がたが」「ぼくが」のがでマークされる表現が、大きく影響していると考えられる。ところが、日本語母語話者の約6割に見られる「×」には区切りの意識がなく、文脈のまとまりは10まで続いている。即ち、それは「なるほど」の前に内容の区切りがあるということである。ここでは、(10)のがの機能よりも「なるほど」の方が大きく働いて、話題の推移という役割を果たしていると考えられるのである。

以上、上述の段落の区切りについて、文章の全体構造のなかの文脈展開という観点からまとめてみる。文脈展開に一貫性をもたせる手段のひとつとして、接続表現が存在する。それが文脈展開上の内容をつなぐ或いは区切る表現形式となる。日本語母語話者の回答(け)に多く見られたのであるが、接続語句という形式を想定しないことを意味する「×」では、区切りの意識が薄かった。同様に、被調査者が03, 05, 06, 08に区切りの回答をしていないことから、ここにも区切りの意識が働いてない。つまり、03, 05, 06に後続する、接続詞をもたない補足や同列の機能の文では、内容上のまとまりが連続していると判断していることが分かる。また、後続の(く)に添加機能が多く見られた08では、形式を想定するけれども、区切りの意識が働いていないことがわかる。このようなことから、接続表現が内容の繋ぎ・区切りの判断の根拠になっている。即ち、接続表現が接続の機能に応じて、内容を区切る役割を担っているということが分かる。

## 6. おわりに

本稿では、文脈展開に一貫性をもたせるための手段のひとつとして、接続表現に焦点を当て、段落のつなぎ方を観察・分析した。その結果、学習者は、内容のまとまりと関連して、接続表現を適切に使用していることが分かった。「逆接型」のように論理的関係が明確な場合はもちろん、添加型や連鎖型の回答に見られるように、文脈の流れをつなぐために接続詞・指示詞・連用／連体修飾語句などの技法を用いて回答している。このような特徴は、日本語母語話者の回答に類似するものであるが、同一類型の回答である場合でも、下位区分では異なる区分に分類されることが多い。

また、母語別にみた場合、言語的に近いという韓国語母語話者の回答よりも、接続表現を使用しなくてもよいという中国語母語話者の方に日本語母語話者に近い回答がみられた。非漢字圏・印欧諸語を母語とする話者については、母語が様々であるため母語による特徴としての一般化は難しい。

段落把握については、母語の違いに関係なく、どの被験者も類似傾向の回答を示した。その第一の要因として、「頭括式」という文章の構成形式が挙げられると考える。

以上で述べたことをもとに、問題点や今後の課題として、次の点を挙げたい。

①本稿の調査と異なる構成形式の文章ではどのような接続表現、あるいは段落意識を表すか。②順接型、転換型など本調査と異なる類型を含む文脈展開では、どのような特徴が出現するか。③母語別の特徴を一般化するには、被験者の数を増やす必要がある。④実際に作成する小論文での使用実態を見る必要がある。

本調査での日本語母語話者と学習者の表現の違い、および母語によって異なる特徴から、接続語句の意味機能の理解とその用法の学習について、より効果的な読解・表現指導を考えていきたい。

### 註)

- 1) 文と文あるいは段落と段落をつなぐ機能をもつ語句や文等の形式を、一括して接続表現と呼ぶことにする。それらは、接続詞・接続助詞等の接続語句、指示語、および繰り返し語句などを指すのであり、2. の先行研究で、西原、佐藤および水野が使用する語とは、指す内容範囲が異なる。
- 2) 全体を統括する段落の位置によって、頭括式、尾括式、双括式、中括式の四種類がある。(市川 1978 pp. 156-157)
- 3) 文と文の論理的関係そのものをいう「文の連接関係」には、「順接型」「逆接型」「添加型」「対比型」「仮定型」「同列型」「補足型」「連鎖型」など八類型に区別される。これらは、文脈形成の特色の上から、三つのグループにまとめて考えることができる。A. 順接型・逆接型=論理的結合関係-二つの事例を論理的に結びつけて述べる関係。B. 添加型・対比型・仮定型=多角的連接関係-二つ(以上)の事例を別々に述べる関係。C. 同列型・補足型・連鎖型=並列的結合関係-一つの事例に関して並列して述べる関係。この三種類八連接類型は、文の連接関係としてだけでなく、段落と段落との連接関係にも当てはめることが可能である。(市川 1978 pp. 88-94)
- 4) 大阪外国語大学の韓国人留学生、李裕薫さん(日本語科)から聞いた内容である。
- 5) ここでは、格助詞「が」も含め、文章や段落の話題を示す、より広い表現形式を「提題表現」と呼ぶことにする。(寺村編 1990 p. 59)
- 6) 「提題表現」と呼んで文を構成するものを指す。(寺村編 1990 p. 71)
- 7) 三種類八連接類型とは、上記3) で述べた連接類型のことである。
- 8) 渡辺吉晴「朝鮮語のすすめ」(p. 28)による。

《参考文献》

- 池上嘉彦 (1983) 「テキストとテキストの構造」『談話の研究と教育 I』国立国語研究所
- 市川孝 (1978) 『国語教育のための文章論概説』教育出版
- 北条淳子 (1980) 「中級読解教材における接続詞の問題」『講座日本語教育』16 早稲田大学教育研究所
- 北原保雄他編 (1981) 『日本文法辞典』有精堂出版
- 佐久間まゆみ (1987) 「段落の接続と接続語句」『日本語学』9 明治書院
- (1991) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要』文学部41
- 佐藤恭子 (1990) 「接続表現の日英比較」『ことばの饗宴 - 寛壽雄教授還暦記念論集 -』くろしお出版
- 杉田くに子 (1994) 「日本語母語話者と日本語学習者の文章構造の特徴 - 文配列に現れた話題の展開 -」『日本語教育』84 日本語教育学会
- 館岡洋子 (1996) 「文章構造の違いが読解に及ぼす影響 - 英語母語話者による日本語評論文の読解」『日本語教育』88 日本語教育学会
- 塚本秀樹 (1990) 「日朝対照研究と日本語教育」『日本語教育』72 日本語教育学会
- 寺村秀夫編 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』おうふう
- 外山滋比古 (1992) 『英語の発想・日本語の発想』日本放送出版協会
- 永野賢 (1986) 『文章論総説』朝倉書店
- 西田直敏 (1988) 「段落とその接続について」『日本語学』2 明治書院
- 西原鈴子 (1990) 「日英対照修辭法」『日本語教育』72 日本語教育学会
- 嶋 弘巳 (1985) 「接続詞と文章の展開」『日本語教育』56 日本語教育学会
- 水野義道 (1985) 「接続表現の日中対照 - 「主従複句」と「条件の接続」 -」『日本語教育』56 日本語教育学会
- 宮島達夫・仁田義雄編 (1995) 「接続詞」『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店
- 渡辺吉銘・鈴木孝夫 (1981) 『朝鮮語のすすめ』講談社現代新書
- Halliday, M. A. K. & Hasan, R. 1976. *Cohesion In English* London: Longman
- Nunan, David. 1992. *Research Methods in Language Learning*: Cambridge UP  
(大阪外国語大学大学院修士課程)

〔資料1〕原文

つき合いが長かったせいか、ぼくはカバに対して、多少身びいき的なところがあって、みんながバカだバカだというカバも「いや、なかなかりこうだよ。」と断言している一人なのである。

だいたい前、ザブコというカバが死んだことがあった。このカバは戦後初めてアフリカから日本に来たカバで、入園以来、十七年余りもぼくが畜養を共にしてきた仲であった。産後の肥立ちが悪くてとうとう糖尿病にかかり、死んでしまったのだが、そのザブコを解剖した時のことである。体重千二百五キロ（これは闘争生活で、ふつうのカバの半分にやせていたため）、腸の長さ四十二メートル、また胃は単胃であることがわかった。肝臓はなんと二十四キロ、心臓十キロと、その図体に全くふさわしいものであった。皮膚の厚さはいうと、胸部は皮下脂肪を入れて五・五センチ、しりの部分では八・二センチもあり、ザブコの場合、特別長い注射針を使用したものの、やはり筋肉まで薬液が届かず、それも死因の一つになったことがわかった。

ところで、ザブコの脳は、おどろいたことに他の部分の偉大さに比べ、たった六百グラムしかなかったのである。そして、多ければ多いほどよしとされているしわが、全くなく、まるで豆腐の表面のようにつべりしていた。

それを見たえらい解剖学の先生がたが「西山さん、カバはやっぱりバカですよ。」と首ってゲタゲタ笑い出した時、ぼくがどんなに腹が立ったか。なるほど、脳重六百グラムといえ、生後二、三か月の人間の赤ちゃんの脳重とほぼ同じである。そしてカバは人間のように話すこともできないければ、難しい計算もできない。そういう比べ方をすると、バカと言われてもしかたがないかもしれない。だが、しかしである。そのカバの脳みそを前に大笑いしている人間、ぼくに言わせれば、そのほうがよほどバカに見えた。

(原文出典 西山登志雄「カバこそぼくの人生」  
『現代図解』三竹堂)

〔資料2〕調査用紙Ⅱ

〔Ⅱ〕 氏名( ) 所屬( ) 年齢( ) 歳 男・女

これは、文章を読んで、どう理解・表現するかを問うためのものですが、人によって色々な考えがあることを知りたいのです。次の指示に従って、作業を進めてください。

1. 次の文章の [ ] の中のことばをぬいてあります。文章を読んで、 [ ] に適当だと考える語句や文を書き入れてください。不要だと思う場合には、×を書き入れてください。(テストではありません。色々な考えを知りたいのです。)

01	<作者の西山さんは、上野動物園の飼育係として、長年カバの飼育に当たった人である。>
02	(カバとの) つき合いが長かったせい、またはカバに対して、多少身びいき的などころ
03	があって、みんながバカだバカだというカバも「いや、なかなかこうだよ。」と断言している一人なのである。(01)←文番号
04	し(か) [ ] ザブコというカバが死んだことがあった。(02)
05	このカバは戦後初めてアフリカから日本に来たカバで、入園以来、十七年余りもぼくが
06	乗を共にしてきた仲であった。(03)
07	産後の肥立ちが悪くてとうとう糖尿病にかかり、死んでしまったのだが、そのザブコを解
08	剖した時のことである。(04)
09	体重千二百キロ(これは園生活で、ふつうのカバの半分にやせていたため)、腸の長さ
10	四十二メートル、また胃は単胃であることがわかった。(05)
11	肝臓はなんと二十四キロ、心臓十キロと、その図体に全くふさわしいものであった。(06)
12	皮膚の厚さという点、胸部は皮下脂肪を入れて五・五センチ、しりの部分では八・二セ
13	ンチもあり、ザブコの場合、特別長い注射針を使用したものの、やはり筋肉まで薬液が届
14	かず、それも死因の一つになったということがわかった。(07)
15	[ (き) ] ザブコの脳は、おどろいたことに他の部分の偉大さに比べ、たった六
16	百グラムしかなかったのである。(08)
17	[ (く) ] 多ければ多いほどよとされているしわが、全くなく、まるで豆腐の
18	表面のようにのっぺりしていた。(09)
19	[ (け) ] えらい解剖学の先生がたが「西山さん、カバはやっぱりバカですよ。」
20	と喋ってゲタゲタ笑い出した時、ぼくがどんなに腹が立ったか。(10)
21	なるほど、脳重六百グラムといえば、生後二、三か月の人間の赤ちゃんの脳重とほぼ同じ
22	である。(11)
23	そしてカバは人間のように話すこともできなければ、難しい計算もできない。(12)
24	そういう比べ方をすると、バカと言われてもしかたがないかもしれない。(13)
25	だが、しかしである。(14)
26	そのカバの脳みそを前に大笑いしている人間、ぼくに言わせれば、そのほうがよほどバ
27	カに見えた。(15)

観察票の調査用紙には、区切り番号、文番号もつけてない。

2. この文章は、いくつかの段落(paragraph)に分かれています。段落と段落の区切りになると考える所に線を引いてください。
3. この文章について、1の作業をした時に、どう感じましたか。文章の内容についても結構ですから、感じたことを書いてください。

---



---



---



---



---